

エップ・レイモンド  
1960年、米国ネブラスカ州生まれ。実家は飼料用トウモロコシなどを作る大規模畑作農家。兵役を拒否してカナダに渡り、ウィネブガ州立大とメノナイト聖書学院を卒業。出身地に戻り、23軒の消費者とCSAに取りくむ。95年の『メノビレッジ長沼』の誕生とともに新規就農し、現在に至る。



荒谷明子(あらたに・あきこ)  
1969年、札幌市生まれ。帯広畜産大学畜産経営学科卒業。在学中にメノナイト教会の交換プログラムでカナダを訪れ、CSAなどに取りくむレイモンドさんと知り合い、94年に結婚。『メノビレッジ長沼』の運営を切り盛りし、会員向けの『野菜だより』も担当。3歳から15歳まで4人の男の子の母親。

大規模な経営にすることで減り続ける米圃などの農家  
滝川康治 『メノビレッジ長沼』の話は四年前にこのシリーズで紹介したことがあります。最近、札幌のライター・金繁美由紀さんが書いた『メノビレッジ』の体験記「トウキビ」(北海道新聞社・08年)を楽しく読ませてもらいました(笑)。  
荒谷明子 わたしたちも彼女の反応が新鮮でした(笑)。  
滝川 僕は農家出身だから、「今の若い人はこんな感覚なんだ」と驚いたり(笑)。この本のなかで、レイモンドさんはアメリカ中南部・ネブラスカ州の大規模な農家の息子だった、とあります。アメリカには行ったことがありませんが、どんなところで生まれ育ったのですか？  
エップ・レイモンド 今度、一緒に(アメリカへ)行きましょう。うちの農場の面積は三百五十ヘクタールくらいで、それが普通の規模でした。三十年近く前のことです。でも、それでも生活できないですね。今は、もともと大規模になり、わたしの出身地の町には千ヘクタールから五千ヘクタールの農場もありま



連載第89回 特別インタビュー(前編)

『メノビレッジ長沼』で地域で支え合う農業(CSA)に取り組み

エップ・レイモンドさん  
& 荒谷明子さん

聞き手 ルポライター 滝川 康治

# 長沼に根づいたもう一つの産直 農業と地域を結びつけ、今こそ 市場主義を脱した経済モデルを

空知管内長沼町の馬追山の麓にある『メノビレッジ長沼』は日本でいち早く、CSA地域で支え合う農業と呼ばれる産直方式を導入した共同農場だ。ここでは伝統的な農法に学びながら畑や水田、養鶏などに取りくみ、会員の元に農畜産物を届ける日々が営まれている。そんな中で、本格的な農作業シーズンに入る前に本誌編集長と共に現地を訪れ、農場運営の中心になっているエップ・レイモンドさん、荒谷明子さん夫妻から、じっくり話を聴いてみた。北米でのCSAの経験や長沼に移り住んだ経緯、季節ごとの作業や周囲との交流の様子…。農業と地域の結びつき、その可能性の大きさを感じさせてくれた今回のインタビュー。まずは前編をお届けする。(4月17日収録)

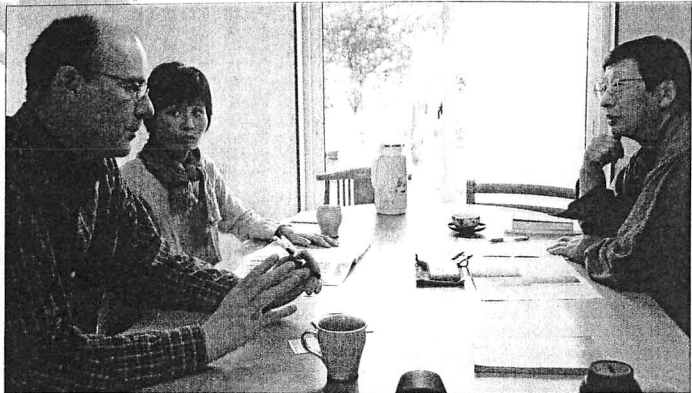
◆CSA = Community Supported Agriculture の略で「地域で支え合う農業」と訳される。同じ地域に住む農家と消費者が提携し、農畜産物を直接受け渡すシステム。「かかりつけの医者がいるように、会員が共同で、かかりつけの農家を持つようなもの」と例えられる。日本の産直をモデルにしたとされており、アメリカやカナダで広がった。

◆メノビレッジ長沼 = 1995年、札幌メノナイトキリスト教会(プロテスタント系)の有志によって、農業を中心にした共同体をめざして誕生。現在は、9haの農地で有機農業を営み、CSAに取りくむ(経営形態は有限会社)。野菜や米、豆類、麦類を作り、500羽ほどの平飼養鶏も。2008年からはパンを焼いて配達する。地域との交流や研修生などの受け入れも積極的に行なってきた。

CSAの会員は札幌を中心に約80人。運営費用を公開し、年会費は先払いが基本。冬場を除いて2週間に1回、野菜などを受け渡す(本誌2006年9月号「消費者が直接支える農業——CSAの可能性」を参照)

【長沼町東6線北13号】

Tel & Fax 0123-89-2385 <http://web.me.com/raymondrepp/menovillage-jp/>



別々の道に進もうか」と考え  
たわけですね。  
荒谷 ちょうどそのとき  
に、彼のところに兵役の徴  
集がきた。でも、国を出る  
と兵役に就かなくていい。  
滝川 四年前の取材のとき、  
兵役拒否をされていたと  
聞きました。  
レイモンド ソ連がアフ  
ガニスタンに侵攻し、カー  
ター大統領が兵役の義務を  
施行していた。  
滝川 なるほど、そういう  
ことか。それでカナダに  
行ったわけだ。  
レイモンド 「この戦争  
の問題があるから農場を離  
れるので、兄さんがやって  
ください」となった。わた  
しは別の生活をする、とい  
うことでカナダに行きまし

た。  
滝川 「カナダで農業をやるう」と  
考えたんですか。  
レイモンド いえ、大学に行きま  
した。カナダに行った六日後、わた  
しのお兄さんはいなくなりました。  
荒谷 亡くなったんです、交通事  
故で。  
滝川 工藤年泰編集長 あらら  
（絶句）。  
レイモンド 「誰が農場の手伝い  
をするのか」とお父さんは心配し  
た。そこで（いったんはカナダから  
戻ってお手伝いをしました）「農業を  
やりたいんだしたら、全面積をやっ  
てください」と父は言った。  
滝川 でも、そうしなかった、と。  
レイモンド はい。大学するとき  
大規模農業をもっと大きくしたら  
農家が少なくなり、農業と化学肥料  
で農業がダメになる、と思った。環  
境問題も考えた。（そう話すとい  
こや父母、兄弟たちはみな「馬鹿  
だ！いい生活ができる農業をやり  
たいでしょ」と言いました。  
滝川 日本でも、そうした考えの  
人は仲間外れにされるケースがあり  
ましたからね。アメリカ人なら尚更  
でしょう。

と一緒で農業をやるうか」という話  
があつて、二年目の秋に大学を休ん  
で一緒に収穫作業をしました。収穫  
が終わって少し暇になったので、メ  
ノナイト教会のメンバーと一緒にデ  
キサス州のある町に行つた。そこは  
夏にすぐく大きな竜巻があり、幅  
一・六キロ、長さ十キロにわたつて  
家をつぶしていました。  
滝川 ものすごい竜巻ですね。

レイモンド 全く家がないところ  
で、そのグループで片づけをしまし  
た。父母は借金もなく、洋服や食べ  
ものがあつた、いい生活をしていま  
したが、わたしは初めて、持ち物を全  
部飛ばされ、お金も家もなくなった

人たちが会つたのです。写真もなく、  
全部失つてしまつていました。  
滝川 そうだったんだ。  
レイモンド わたしはまだ若い。  
「これから、どんな仕事をしようか」  
と考えました。

レイモンド 誰か農場の手伝い  
をするのか」とお父さんは心配し  
た。そこで（いったんはカナダから  
戻ってお手伝いをしました）「農業を  
やりたいんだしたら、全面積をやっ  
てください」と父は言った。  
滝川 でも、そうしなかった、と。  
レイモンド はい。大学するとき  
大規模農業をもっと大きくしたら  
農家が少なくなり、農業と化学肥料  
で農業がダメになる、と思った。環  
境問題も考えた。（そう話すとい  
こや父母、兄弟たちはみな「馬鹿  
だ！いい生活ができる農業をやり  
たいでしょ」と言いました。  
滝川 日本でも、そうした考えの  
人は仲間外れにされるケースがあり  
ましたからね。アメリカ人なら尚更  
でしょう。

と一緒で農業をやるうか」という話  
があつて、二年目の秋に大学を休ん  
で一緒に収穫作業をしました。収穫  
が終わって少し暇になったので、メ  
ノナイト教会のメンバーと一緒にデ  
キサス州のある町に行つた。そこは  
夏にすぐく大きな竜巻があり、幅  
一・六キロ、長さ十キロにわたつて  
家をつぶしていました。  
滝川 ものすごい竜巻ですね。

平和主義と農業をつなげて  
仕事を創るアイデアを出す

レイモンド (カナダの大学では)

平和主義を勉強しました。

荒谷 テキサスでも、貧しい人は  
トレーラーハウスに住んでいて、そ  
うした人たちがいつも竜巻にやられ  
てしまう。(レイモンドさんは貧富  
の格差があることに疑問を感じてい  
た、といいます。市場主義の経済の  
仕組みで必ずしも社会は良くなって  
いるわけではない、という疑問も  
あつたみたいです。  
滝川 そこで、カナダの大学では  
平和主義を勉強した、と。  
レイモンド だけど、まだ農業に  
対する興味がありました(笑)。  
滝川 で、大学は卒業された？  
レイモンド 六年間かかったけれ  
どね。少しずつ勉強して、平和主義  
と農業をつなげる仕事をしました。  
戦争や暴力で人殺しをすることだけ  
でなく、経済や社会、政治のあり方  
によって、人が実際に殺されていく  
ことがある、と気づいたので、  
でも、それはゆつくりと進んでいく  
ので、気づかないことが多い。  
田舎から都会へ人が流動してい

レイモンド サスカチュワンは寒  
いから菜種とか小麦ですね。(アメ  
リカの)わたしの出身地では三十年  
前からデントコーン(飼料用トモ  
ロコシ)ばかり作っています。今は、  
遺伝子組み換え(GM)のトモロコ  
シや大豆が登場したので農家は規模

を倍にしました。トモロコシや大  
豆の種を蒔くとき、同じ機械を使っ  
ています。  
滝川 なるほど。  
レイモンド (コーン、大豆とも  
に)収穫も同じ機械を使う。だから  
種蒔きも収穫時期も作業がぶつかり  
ない。薬を撒く大きな機械(スプ  
レーヤー)も持つていて、除草剤を  
ブアーツと撒く。この三十年間のう  
ちに規模がすごく増えました。  
滝川 子どものころ、小さな農家  
もけっこういたんですか？  
レイモンド 小さいといつても北  
海道の農家よりも大きいのです  
が、子どものころに父が、「こっちに  
農家が住んでいた。あつちもだよ」  
と言つていました。そのときも農家  
が減つていたのですが、今はもつと  
もつと少なくなつた。父は一九四九  
年に農業を始めました。それから一  
九八〇年までの間に農地を買つて規  
模を大きくして、四軒の農家をつぶ  
しました。

はダメだ」となつたとか。  
レイモンド 大事な言葉は「コ  
ミュニティ」です。うちのおじさん  
やおばさんは、毎年冬になると豚を  
屠殺したり、いろんな仕事をやって  
いました。でも、農業の規模がどん  
どん大きくなると忙しくなつてしま  
う。簡単に安いからスーパーに行つ  
て肉を買うけれど、味が全然違う。  
子どものころ、仕事のお手伝いをし  
て、いとこと一緒に遊びました。そ  
れはいい思い出です。規模が大き  
くなると、そうした生活ができなく  
なつた。  
大学で先生が経済の考え方を教え  
た。「農地と労働と資本をどうマネー  
ジメントするか」ということで、生  
活のすべてがお金で計られているよ  
うな内容でした。もし、隣の農家が  
病気になるって手伝いに行つたら、お  
金にならない。それはやめたほうが  
いい。先生はそう教えなかつたけ  
れど、もし生活全部をお金で考えたら  
ら、町はダメになる。「その考え方は  
おかしいなあ」と思いました。  
滝川 それで一年間でやめてしま  
うことになるわけだ。で、どこかの  
農家に入つたんですか。  
レイモンド 「父の跡を継いで兄

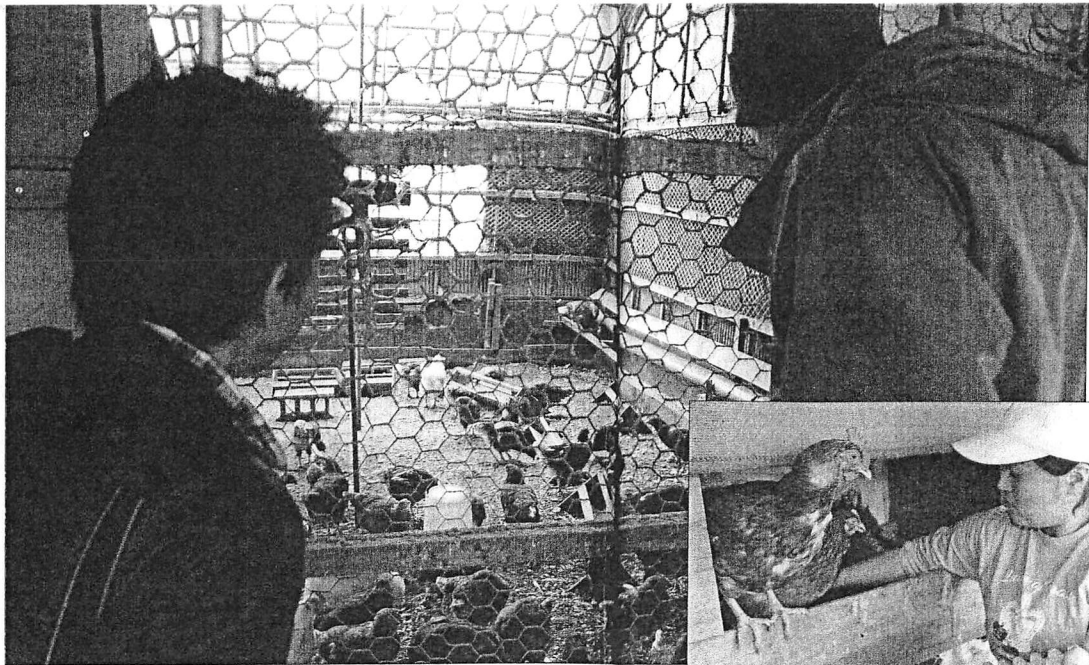
と一緒で農業をやるうか」という話  
があつて、二年目の秋に大学を休ん  
で一緒に収穫作業をしました。収穫  
が終わって少し暇になったので、メ  
ノナイト教会のメンバーと一緒にデ  
キサス州のある町に行つた。そこは  
夏にすぐく大きな竜巻があり、幅  
一・六キロ、長さ十キロにわたつて  
家をつぶしていました。  
滝川 ものすごい竜巻ですね。



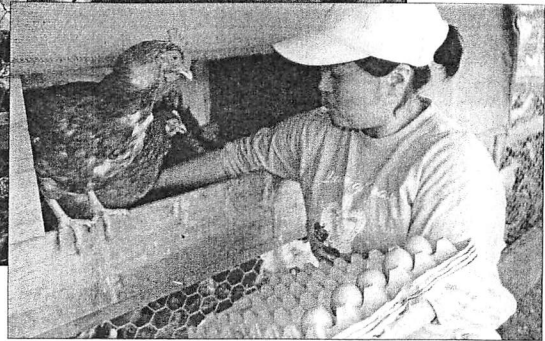
『メノビレッジ長沼』には国内外から老若男女がやってくる。さまざまな作業を分担し、  
昼食時には一堂に会して自家産の野菜などを使った料理を楽しむ(06年7月撮影)

うち八八％は輸出されていた。カナダとアメリカとメキシコはNAFTA（北米自由貿易協定）を締結しています。アメリカの製粉会社がカナダの会社を買収し、マニトバ州の製粉会社を閉めました。そのため、マニトバ州のほとんどの人は、アメリカで製粉された小麦粉でパンを焼いて食べた。

九〇年に、教会のグループと一緒に五家族でウイニペグ市でパン屋さ



500羽ほどの鶏を平飼しており、地元・道内産の飼料を与えている。卵はCSAの会員宅に届く(4月17日)



くことは時代の流れ——と見られることがありますが、そうではない。たとえば、経済の考え方が大規模化していくことが流行だと教えると、どんどん規模を拡大する農家がいる一方で、土地を離れなければならぬ人が出てきます。だから、時代の傾向ではなくて、社会がそうさせているんだ、と思った。

滝川 なるほど、それで平和主義と農業が繋がってくる。

レイモンド そうした経済のあり方ではなくて、人が互いに思いやりたりする。わたしが小さなころ、村には助け合いがあった。土地も地方を落とさずに世話されるようなやり方があるし、人々が必要な食べものを手にするができるような経済のあり方があるに違いない、と思った。そのときは、どんな経済のあり方かは分からなかったけれど、きっとあるだろう、と。十二年間、カナ

ダのウイニペグ市(注)マニトバ州の州都)に住んでいましたが、友だちといつも農業や食べもの話ばかりしていました(笑)。いろんなアイデアを考えた。

滝川 十二年の半分は大学生として、あと六年間はどんな暮らしをしていったんですか。

レイモンド いろいろやりましたよ。大工の仕事もね。

滝川 それが今の農場の仕事にも役立っているわけだ。

レイモンド そうそう。受刑者が社会に出るまでの間、一緒に暮らしながらカウンセリングの仕事もやっていました。教会の仕事です。二年間、農業問題の仕事もしました。

荒谷 カナダには「コミュニティ・オーガナイザー」という職業があるんですね。

滝川 日本でいうと、どんなイメージの仕事になるのかな。

荒谷 アイデアを出したりする。滝川 コンサルタントみたいな。

レイモンド 町の人と一緒に考えて、「問題は何だろう」「これからどうしましょう」とアイデアを出したりする。いっぱいお金はいりません。一生懸命考えて(方向が)分かっていたら

滝川 何軒くらいで始めたのか。

レイモンド 二百軒ですね。農家は二、三人で、配達デポに農産物を持っていくと五十人くらいが取りにくるところが市内に六カ所あった。会員のなかに世話役がいたわけです。

滝川 野菜を供給する農家が二、三軒いたんですか。

レイモンド 野菜農家は一軒だけで、CSAが始まるとプロイラーなどの農家仲間が増えていった。

滝川 野菜から畜産へと広がっていったわけだ。

レイモンド システムが始まると、「チーズや牛乳、豆腐もできる……」という話になった。インフラはあまりいらないです。それが面白かった。わたしは小さな町やウイニペグの市民と農業問題の勉強会をやっています。すぐ興味のある人は小グループをつくり、CSAを紹介するビデオと一緒に見たりした。その小グループのなかには、いつもお金はあまりません。わたしはいつも、「もし、いいアイデアがあれば、お金はやつ

お金をちょっと集めて新しい道をつくり、地元の人たちと一緒に問題解決していく。(カナダでの)最後の二年間は、そうした仕事をしました。

「小規模技術で地産地消」へ「パン屋つくりCSAに着手」

滝川 そのころカナダでCSAと出会うわけですか。

荒谷 カナダの中西部では初めてのCSAだったんですね。

滝川 お二人はカナダでCSAをやっていた、と。

荒谷 当時、わたしは帯広畜産大学の学生で、一年間休学して教会の交換プログラムでカナダを訪れたんです。ちょうど、「CSAを立ち上げよう」という動きがある時期に行きました。

滝川 留学のような形で？

荒谷 学校には行かず、ホームステイですね。それでCSAの仕事を手伝っていたんです。

レイモンド 助かりましたよ。

滝川 そこで二人が出会ったわけですね。

荒谷 はい。一九九一年でした。

レイモンド マニトバ産の小麦の

てくる」と言った。

編集長 お金はあとからついてくる、という感じですか(笑)。

レイモンド はい。

「頭で考えることよりも体験を通じて行動に移す」

滝川 荒谷さんは、そこでずっとCSAを手伝ったんですか。

荒谷 六カ月で短かったですね。

滝川 それで、「一緒にいるらう」という話に？

荒谷 わたしが大学を卒業した年にレイモンドさんが日本にやってきて、一緒に農業研修をして、一年後に結婚しましたね。

編集長 今、「ダーリンは外国人」という映画が上映されています。外国人の夫を持つ日本人妻の奮闘記で、人間味あふれる映画なので僕は好きなんです。人は「プラス一」が二ではなく、時には三にも四にもなる——というのが僕の持論です。人と人との結びつきは、それほど力があると思う。皆さんの取り組みを見ていると、まさにそうなっている。出会いと現状を振り返ってみて、その結びつきについて、奥様から見ても、どんな考えをお持ちかお聞きしたい。

んを始め、一馬力、直径二十センチの石臼を買いました。九一年には、世界の小麦の値段が(暴落し)半額になった。(アメリカから)大きな製粉会社がおかしくなったら、農家の手取り価格はもっと高かったはず。それはおかしい」と、小規模技術で地産地消を進めて地域経済をよくできる方法を考えた。小さなパン屋をつくりました。いろんな新聞に取り上げられ、テレビ会社がビデオを作り、

荒谷 違う文化だということについて言えば、日本で当たり前と想っていたことがレイモンドさんから見ると驚きだったり、「エツ」という疑問だったりする(笑)。それはよくあります。わたしにとって発見だったのは、日本的なものです。たとえば、アメリカではCSAを立ち上げるのときに参加していたんですが、食に関心のある都会に暮らすお母さんや、いろんな職業の人たちと、「食べるつながり」を求めている農家の人たちが初めて出会ったところにわたしもいた。

そこでは、お互いの感じている問題とか、「こうなったらいいんじゃないか」と希望を出し合い、その話のなかで、「ぜひ、一緒にやろう」と気持ちがあいそぎに進んでいくんです。でも、日本でやってみると講演会で聞いたり、問題点を語り合うなど頭で考えることからは、行動にはなかなか進まない。

日本人がどんなときに行動に移すかという、体験したときだな、とCSAをやっているうちに気がついた。たとえば、ここに来て裸足で田んぼに入って田植えしたときに、今まで関心を持っていた障害者の問題

した。

レイモンド わたしのいとこはみんな同じ高校を卒業して、合計五十三人いる。小学校、中学校、高校すべて同じです(笑)。おじさんやおばさんは、みんな農業をやっています。今、その町で農地が売りに出ても、それを買うだけの力を持っている農家は五軒しかいません。土地の値段が信じられないくらい高くなりました。

滝川 長沼のあたりと比べると、アメリカの農地の値段は？

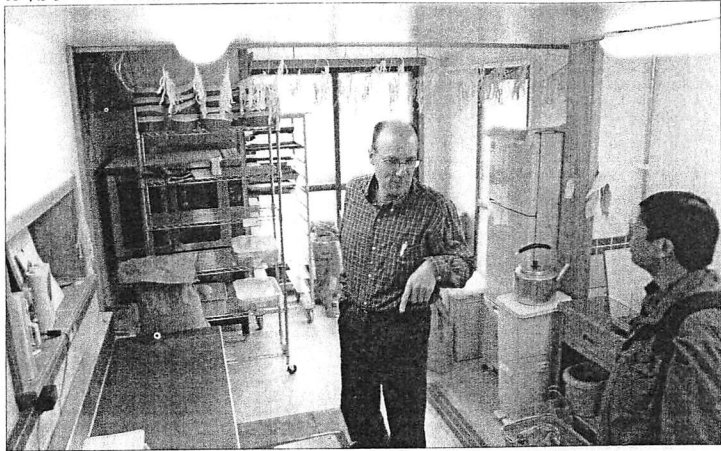
レイモンド 十アール当たり十五万円くらいですね。

滝川 北海道だと条件のあまり良くない地域の畑の値段です。

荒谷 そう違うんですね。

レイモンド 宅地として売れば四十、五十万円はします。トウモロコシを作ると十アール当たりの売り上げは十五万円くらいだけれど、コストがすごく高い。一分間に地下水を四千キロリットルくみ上げて使う、スプリンクラーもすごく大きく、高価なんです。〇七年から〇九年までの間に肥料の値段が倍になり、種代も同じくらい高くなった。燃料代もです。

08年からパンづくりも始めた。工房は自分たちの手づくり



「みなと違う農業を」と助言  
周囲の農家がサポート役に  
滝川 この人たちが受け入れを歓迎してくれたのですが、長沼の人や土地の魅力とは？

レイモンド この家はすごくボロボロでした。長沼にきて家を修理していると、カリフォルニア州で農業研修をした経験がある(近所に住む)仲野勤さんがやってきて…。

荒谷 「How do you do」と言ったんです(笑)。

レイモンド 二月の雪が積もっているところです。それで勤さんの家に行き、隣の農家の高橋昭さんと一緒に座っていろいろな話をしました。

荒谷 お二人とも英語ができるんですね(笑)。

レイモンド わたしは、日本語はほんのちよつとしかしゃべれなかった。勤さんがすごくいいアドバイスしてくれました。長沼の人たちと同じ農業をするん

や社会的な問題がなかった、とか体験を通して「ハッ」とすると、何かが始まるんですね(笑)。

アメリカでCSAを始めて間もなく長沼に呼ばれて…

滝川 実際にはCSAをやったのはアメリカでしたよね。

荒谷 結婚する前から、ずっと彼は「故郷に帰りたい」と思っていた。レイモンド 故郷に父親の(所有する)耕作していない、機械が入りづらい三角形の土地があつて、そこで野菜づくりをしたんです。

滝川 Uターンしたわけだ。

荒谷 そうです。だから、わたしも結婚するときは、「一生、アメリカで暮らすんだ」と覚悟して行つたんです(笑)。

編集長 ところが、そうならなかった、と。

滝川 一方で北海道のほうは、メノナイト教会の人たちがCSAの準備を進めていたわけです。

荒谷 そういう話が持ち上がっていました。

レイモンド 日本での農業研修のとき、教会でカナダの仕事について発表しました。教会のメンバーは、

「北海道にも同じ問題がある」と言っただけで、詳しく話が出なかった。

滝川 一つの要素として、こちらの教会で話したのがきっかけで「北海道でCSAを立ち上げよう」となったわけですか。

荒谷 そうだったんでしょうね。

レイモンド 結婚してアメリカに行つたとき、教会の人たちは右狩や伊達、長沼…と農地探しをしてみました。そのことを、わたしたちは全然知らなかった(笑)。

荒谷 (教会の関係者が)ここを訪れたときに、仲野勇二さんや仲野勤さんとか近所の人たちが集まりを持ってくれたんですね。教会みたいな人のつながりのある人たちが入れれば、農業も失敗することが少ないだろう。ぜひきてほしい」と言ってくださつたそうです。森や田畑のある地形が気に入って、「ここでやろう」とみんなで決めて、有限会社をつくりました。

滝川 それでアメリカから呼び寄せられた、と。

荒谷 農場の名前も決まっていた、わたしたちが後から参加した感じなんです(笑)。

滝川 アメリカでCSAを始めて

間もない時期ですが、向うで続けることへの未練はなかったんですか。

荒谷 わたしは、「もつと頑張つてみよう」と思つたんですが、レイさんは違う考えでした。大規模経営になつて機械は高価なものになり、壊すと大変なので自分のおじいちゃんにも機械に触らせない。近所の人々が仕事を手伝うようなことも一切なく、思い描いていた農業とは違つていた。いとこや同級生は素晴らしい友達なんだけれど、方向が全然違うところで分かり合えない、と言つていま

だつたら、アメリカに帰つたほうがいい。みんなと違う農業をやりなさい。それを期待しています」と言つた(笑)。

滝川 いいアドバイスですね。

レイモンド それで、すごく自由になつたね(笑)。

編集長 アドバイスの真意はどういうことだったんですか。

滝川 自分たちもそうだったからじゃないかな。リング農家の仲野紀年さんに聞いた話だけど、仲野一族は深川のほうから入植したそうです。

荒谷 「新しい風が必要だ」と思つたんじゃないですかね。

滝川 それと、アメリカに行つていたころの自分の体験を踏まえたものじゃないかな。この人たちから見たら、仲野一族はよそ者だったわけだから。

荒谷 わたしたちが長沼にきたとき、仲野さんたちが入植して二十五年になる、とおっしゃつていました。まだ、よそ者扱いです」と言われたことがすごく印象的でした。その仲野さんのおかげで、わたしたちは、いろんな人たちに助けられ、よそ者と弾かれるようなことは一回も経験してないんですね。

「北海道にも同じ問題がある」と言っただけで、詳しく話が出なかった。

滝川 一つの要素として、こちらの教会で話したのがきっかけで「北海道でCSAを立ち上げよう」となったわけですか。

荒谷 そうだったんでしょうね。

レイモンド 結婚してアメリカに行つたとき、教会の人たちは右狩や伊達、長沼…と農地探しをしてみました。そのことを、わたしたちは全然知らなかった(笑)。

荒谷 (教会の関係者が)ここを訪れたときに、仲野勇二さんや仲野勤さんとか近所の人たちが集まりを持ってくれたんですね。教会みたいな人のつながりのある人たちが入れれば、農業も失敗することが少ないだろう。ぜひきてほしい」と言ってくださつたそうです。森や田畑のある地形が気に入って、「ここでやろう」とみんなで決めて、有限会社をつくりました。

滝川 それでアメリカから呼び寄せられた、と。

荒谷 農場の名前も決まっていた、わたしたちが後から参加した感じなんです(笑)。

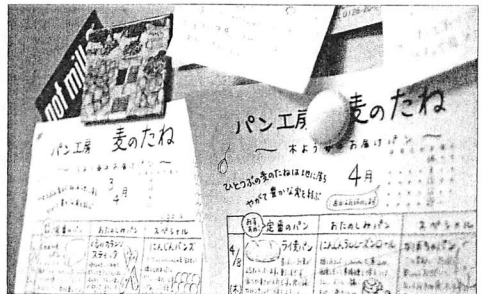
滝川 アメリカでCSAを始めて

間もない時期ですが、向うで続けることへの未練はなかったんですか。

荒谷 わたしは、「もつと頑張つてみよう」と思つたんですが、レイさんは違う考えでした。大規模経営になつて機械は高価なものになり、壊すと大変なので自分のおじいちゃんにも機械に触らせない。近所の人々が仕事を手伝うようなことも一切なく、思い描いていた農業とは違つていた。いとこや同級生は素晴らしい友達なんだけれど、方向が全然違うところで分かり合えない、と言つていま

間もない時期ですが、向うで続けることへの未練はなかったんですか。

荒谷 わたしは、「もつと頑張つてみよう」と思つたんですが、レイさんは違う考えでした。大規模経営になつて機械は高価なものになり、壊すと大変なので自分のおじいちゃんにも機械に触らせない。近所の人々が仕事を手伝うようなことも一切なく、思い描いていた農業とは違つていた。いとこや同級生は素晴らしい友達なんだけれど、方向が全然違うところで分かり合えない、と言つていま



滝川 四年前よりも増えていますね。札幌の家庭が多いんですか。  
荒谷 札幌が一番多く、あとは江別に十軒くらい、北広島にもいます。卵がほしい人に定期的に届けているので、一昨年からパンを始めています。ここで製粉した小麦やライ麦も使い、酵母を起こして焼いています。それも配達するようにして、あとはお米とか豆も注文があればCSAの

荒谷 けっこう大変ですよ。滝川 一軒の家に届けられる種類

荒谷 今、CSAは一週おきに皆さんのところに野菜などをお届けしています。五月の半ばくらいに始まり、十一月末か十二月初めくらいまで合計十五回、一軒の家に届けていますね。今は会員が八十軒くらいです。

荒谷 こちらは側は八十軒を四つに分け、週に二回(火曜と金曜)という形で二週間で一巡りするようになっています。ただ、届くほうは、二週間に一回だと野菜が持たない」という声はありますね。たいていの方が自宅配達を希望するので、毎週届けるようにすると、労力も時間もかかり

荒谷 レイさんは読んだり書いていないので、わたしがやるとなる」とシンプルなのがよい。  
編集長 永続的な取りくみをめざすなかでは、法人はあつたほうがいいと思いますね。  
滝川 『モノビレッジ長沼』のCSAについて、現状を大まかに紹介してください。

荒谷 原前払いなんです。CSAをやめて三年目になるんですが、半額になったので前払する人が増えましたね。毎週届けていたときは皆さんに会員費を決めてもらう方法でしたが、半額になったら三万円ちょっとなので、その意味が出てこなくてやめました。みんなで分けあい、社会のなかでお金がある人だけが食べられるようにはしない、という思いは同じです。

荒谷 原前払いなんです。CSAをやめて三年目になるんですが、半額になったので前払する人が増えましたね。毎週届けていたときは皆さんに会員費を決めてもらう方法でしたが、半額になったら三万円ちょっとなので、その意味が出てこなくてやめました。みんなで分けあい、社会のなかでお金がある人だけが食べられるようにはしない、という思いは同じです。

荒谷 原前払いなんです。CSAをやめて三年目になるんですが、半額になったので前払する人が増えましたね。毎週届けていたときは皆さんに会員費を決めてもらう方法でしたが、半額になったら三万円ちょっとなので、その意味が出てこなくてやめました。みんなで分けあい、社会のなかでお金がある人だけが食べられるようにはしない、という思いは同じです。

レイモンド 同じ年に麻田信二さん(元副知事)やレストラン『CRESS』を経営している干場一正さんも、果樹園を営む仲野勇二さんの紹介で長沼にやってきました。荒谷 「お米は上坂一男さんに聞

元からあった、と。荒谷 そうです。滝川 養鶏は後から始めた。荒谷 十年くらい前からですか。滝川 養鶏は土づくりの面が大きかったんです。それとも卵という



雪室もあり、一年を通してジャガイモの供給を欠かさない。植え付け前にハウスに並べ、発芽を促す(4月17日)

田んぼは

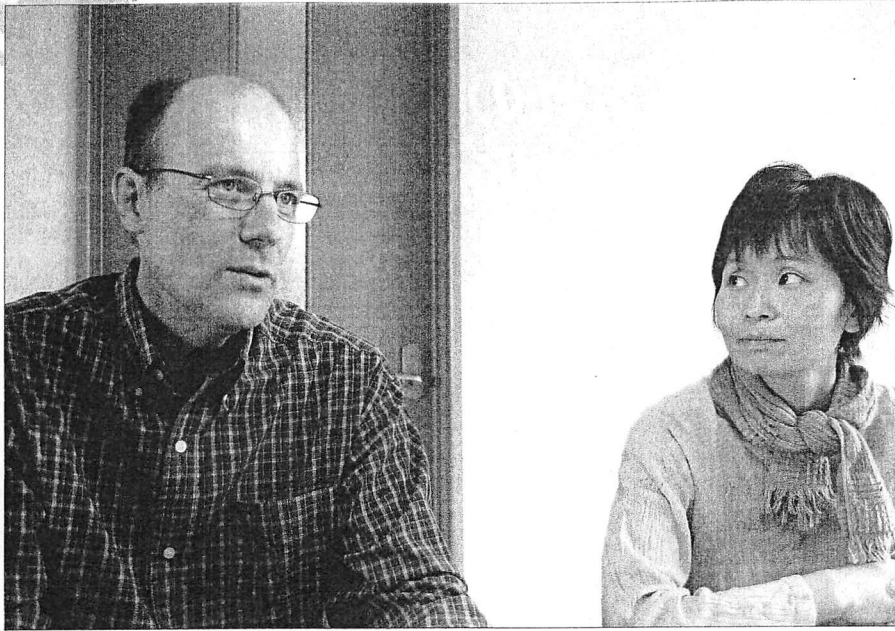
品目を増やそうとか。荒谷 やはり「循環させる」ということが一番にありましたね。それと長沼で自然養鶏をやっている村田博美さんが、「卵をやりなよ」といつも誘ってくれて(笑)。滝川 いろんな先生役に恵まれたわけですね。荒谷 隣の農家が仕事をしていると、レイモンドさんはすぐにそこへ行行って、「今日は何をやっているんですか?」と聞く。滝川 農家の人に好かれる人柄だなあ、と僕はつくづく思うんです。荒谷 いろんな話を聞いてきて、飲み会ではいっぱい飲まされてね(一同爆笑)。

レイモンド (飲み会では)本当に面白い話が出るんですよ(笑)。まわりの農家のことは全部知らなかったけれど、「ああ、なるほど」と。編集長 聞きたくない話も入っていたりして(笑)。レイモンド どんどん言葉も分かってきた。荒谷 「ここはぬかる田んぼだな」と思っていたら「あそこは昔、池だったんだよ」とか。「有機農業だから」と孤立してやる人もいるけれど、増やし、一緒に自給自足に近づいていけるようになったらいいな、とは思っているんですけど。滝川 冬は鶏の世話くらいで時間に余裕があるとか。荒谷 大事な仕事があるんです。レイモンド 肥料を発酵させる。滝川 それは春先では。レイモンド 肥料を発酵させる。滝川 それは春先では。レイモンド 肥料を発酵させる。滝川 それは春先では。



カボチャの脇に燕麦やライ麦を栽培し、土づくりと風除けに役立つ(06年7月撮影)

「おいらの田んぼ」もあってイベント時は歌や踊りの輪。滝川 会員と一緒にやる行事もありましたよ。荒谷 「みんなの田んぼ」をやっています。



荒谷 そうですね。お互いの田んぼは区画を決めて、家族や仲間と借りてもらい、オーナーになる。荒谷 スタッフたちが会員の得意なところをやる、と。

荒谷 水管理とかはこちらなんです。草取りなどはやってもらう。それと、ハロウインのときお祭りをやるんです。うちの子もたちが学校に通うようになり、小中学生の友だちがいっぱい農場に来るよ

レモンド 「みんなの田んぼ」は小さくした。

荒谷 草取りができなくてね。自分のものでないですから。

編集長 責任を持たない、と。

荒谷 そうなんです。お互いの田

うになつた。北長沼には昔から「田植え歌踊り」があるんです。小学校で着物を着て踊るんですが、田んぼのイベントやハロウインのときは脱穀やお米関係のものも関係してくるので、地元の小中学生がみんなに教え、全員で踊るんですよ。「みんなの田んぼ」では餅米を作るので、餅つきをしたりします。

札幌の「友の会」に幼児生活団という幼稚園のようなものがあるんですが、その子たちがジャガイモを植えにきますね。草取りと収穫とで年三回来るんですけど。

滝川 「幼児生活団」というのは初めて聞きました。

荒谷 小学校上がるまでの三年間、週一回だけ通うところなんです。非常に面白い教育をやって、うちの子どもたちはみんなそこに行つたんですけど。東京にある自由学園の幼児科みたいなところですね(注1)幼児生活団は「婦人之友」「自由学園」「友の会」の創立者・羽仁もと子(1873-1957年)によって始められた幼児教育の場。現在、全国12ヶ所にある。

研修や実習などで千客万来CSAの研究も増えてきた

滝川 これは、研修にやつてくる人も多いですよね。

荒谷 研修生というより、ほとんどスタッフですね。今、一緒に生活している人が四人います。一昨年から(レイモンドさんが)酪農学園大学で週一回、キリスト教を教えるようになったんですよ。

滝川 高橋一先生(宗教授任)が担

荒谷 そうですね。お互いの田んぼは区画を決めて、家族や仲間と借りてもらい、オーナーになる。荒谷 スタッフたちが会員の得意なところをやる、と。

荒谷 水管理とかはこちらなんです。草取りなどはやってもらう。それと、ハロウインのときお祭りをやるんです。うちの子もたちが学校に通うようになり、小中学生の友だちがいっぱい農場に来るよ

レモンド 「みんなの田んぼ」は小さくした。

荒谷 草取りができなくてね。自分のものでないですから。

編集長 責任を持たない、と。

荒谷 そうなんです。お互いの田

うになつた。北長沼には昔から「田植え歌踊り」があるんです。小学校で着物を着て踊るんですが、田んぼのイベントやハロウインのときは脱穀やお米関係のものも関係してくるので、地元の小中学生がみんなに教え、全員で踊るんですよ。「みんなの田んぼ」では餅米を作るので、餅つきをしたりします。

札幌の「友の会」に幼児生活団という幼稚園のようなものがあるんですが、その子たちがジャガイモを植えにきますね。草取りと収穫とで年三回来るんですけど。

滝川 「幼児生活団」というのは初めて聞きました。

荒谷 小学校上がるまでの三年間、週一回だけ通うところなんです。非常に面白い教育をやって、うちの子どもたちはみんなそこに行つたんですけど。東京にある自由学園の幼児科みたいなところですね(注1)幼児生活団は「婦人之友」「自由学園」「友の会」の創立者・羽仁もと子(1873-1957年)によって始められた幼児教育の場。現在、全国12ヶ所にある。

研修や実習などで千客万来CSAの研究も増えてきた

滝川 これは、研修にやつてくる人も多いですよね。

荒谷 研修生というより、ほとんどスタッフですね。今、一緒に生活している人が四人います。一昨年から(レイモンドさんが)酪農学園大学で週一回、キリスト教を教えるようになったんですよ。

滝川 高橋一先生(宗教授任)が担

こないので、「体育のときとか困るんじゃないの」と聞くと、「危険だから体育館の外には出ないんです。変質者が見に来るから」と言われた(笑)。今はお休みしていますが、WOOOF(※欄外でいるんな国の人たちが聞きたり)。出かけて行かなくても、いろいろな文化や都会の様子とかが聞えてくるんだなあ、と(笑)。

レイモンド 去年は四人(メノ、ドレッジ長沼)やCSAをテーマに)大学の卒業論文を書きました。慶応大、三重大、北大、大阪外語大の学生です。

滝川 皆さん泊まりがけで調べて卒論を書くわけだ。

レイモンド 先週は二日間、論文を直しました(笑)。

荒谷 博士論文は英語なんですわ。「直してほしい」と言われて。

編集長 論文を添削して赤ペンを入れた、と(笑)。

荒谷 大学の先生たちのなかでもCSAを研究する人が増えている。滝川 でも、実際にCSAをやる人がなかなか増えないところが…。レイモンド それが問題です。

※WOOOF(ウーフ)＝国内外から訪れる人たちがホストとして登録された有機農場などで1日6時間働く代わりに、農場側が食事と宿泊場所を無償で提供する取り組み。1970年代にイギリスで始まり、現在は世界20カ国以上に事務局がある。北海道のホスト登録数は60カ所あまり。WOOOFジャパン <http://www.woofjapan.com/>



冬の間、鶏糞やもみ殻燻炭、米ぬか、魚粕などを原材料に発酵肥料を製造。仕上がり状態を確認する(4月17日)

こないので、「体育のときとか困るんじゃないの」と聞くと、「危険だから体育館の外には出ないんです。変質者が見に来るから」と言われた(笑)。今はお休みしていますが、WOOOF(※欄外でいるんな国の人たちが聞きたり)。出かけて行かなくても、いろいろな文化や都会の様子とかが聞えてくるんだなあ、と(笑)。

レイモンド 去年は四人(メノ、ドレッジ長沼)やCSAをテーマに)大学の卒業論文を書きました。慶応大、三重大、北大、大阪外語大の学生です。

滝川 皆さん泊まりがけで調べて卒論を書くわけだ。

レイモンド 先週は二日間、論文を直しました(笑)。

荒谷 博士論文は英語なんですわ。「直してほしい」と言われて。

編集長 論文を添削して赤ペンを入れた、と(笑)。

荒谷 大学の先生たちのなかでもCSAを研究する人が増えている。滝川 でも、実際にCSAをやる人がなかなか増えないところが…。レイモンド それが問題です。



連載第90回 特別インタビュー(後編)

『メノビレッジ長沼』で地域で支え合う農業(CSA)に取り組む

エップ・レイモンドさん

& 荒谷明子さん

聴き手 ルポライター 滝川 康治

# 全世界共通のファーマーズ スピリットで地域に溶け込み 長沼で明日の農業モデルを

15年前に日本でいち早くCSA(地域で支え合う農業)を導入し、田畑を作り、鶏を飼い、パンも焼き、農畜産物を会員の元に届けている共同農場『メノビレッジ長沼』。運営の中心になってきたエップ・レイモンドさん、荒谷明子さん夫妻は、この地にすっかり溶けこみ、国内外から訪れる人たちと交流の輪を広げている。本誌編集長と共に臨んだ今回のインタビュー。後編では、企業による農家のコントロールにつながる遺伝子組み換え(GM)作物に反対する理由や、農業に対する補助金のあり方、地域づくりに対する思いなどに耳を傾けた。長沼の人たちとのつながりを深め、日本のCSA活動のハイオビアとして発信する機会も増えてきた夫妻の話から、明日への希望を感じ取っていただきたい。



エップ・レイモンド

1960年、米国ネブラスカ州生まれ。実家は飼料用トウモロコシなどを作る大規模畑作農家。兵役を拒否してカナダに渡り、ウィネベグ州立大とメノナイト聖書学院を卒業。出身地に戻り、23軒の消費者とCSAに取りくむ。95年の『メノビレッジ長沼』の誕生とともに新規就農し、現在に至る。

荒谷 明子(あらかた・あきこ)

1969年、札幌市生まれ。帯広畜産大学畜産経営学卒。在学中にメノナイト教会の交換プログラムでカナダを訪れ、CSAなどに取りくむレイモンドさんと知り合い、94年に結婚。『メノビレッジ長沼』の運営を切り盛りし、会員向けの『野菜だより』も担当。3歳から15歳まで4人の男の子の母親。

◆メノビレッジ長沼◆

【長沼町東6線北13号】Tel & Fax : 0123-89-2385  
<http://web.me.com/raymondrepp/menovillage-jp/>

GM作物は企業が農家をコントロールする技術

滝川 レイモンドさんは、遺伝子組み換え(GM)作物反対運動によく登場されますが、この問題に疑問を持ち始めたのはいつからですか。

レイモンド わたしが日本にやってきたあとの一九九六年、遺伝子組み換え作物の商業栽培が始まりました。最初は詳しく分からなかったけれど、一九九九年に長沼町内で生活クラブ生協が勉強会を開いたんです。

荒谷 長沼にも生活クラブの組合員がいて、わたしもその一員です。(メノビレッジ長沼が発行している)『野菜だより』にレイモンドさんが書いた文章を見た組合員から希望があり、「遺伝子組み換え作物ってなんだろう?」という小さな勉強会を開きました。

レイモンド そのころはまだ詳しく知らなかった。勉強して一番驚いたのは、科学者が遺伝子の働きを見つけていて、スイッチを入れたり消したりできる、という事実です。それを使って種子会社が農業や食をコントロールできるように。と、雑誌に載った会社側の言葉を読むと、

「収穫量が増える」「除草剤を減らせる」とウインウインのことが書いてあり、「本当かい?」と思った。わたしのいとこは最初からGM作物を作りましたが、二〇〇〇年までの間に遺伝子組み換えの種の値段が上がっていった。去年と今年を比べると、三〇%も上がっています。

滝川 そんなにですか!

レイモンド 遺伝子組み換えを研究している日本人の科学者は、「アメリカを中心に世界でこんなに作られているのは、農家にいいことがあるからに違いない。だから、GM作物は増えている」と説明しますが、実家に行つて農家の声を聞くと違っていました。今までのような品種があったけれど、「収量が高い」「いい種だ」と評判のものは全部、遺伝子組み換えに代わってしまった。そうではない品種を選ぼうとすると、たいした評判ではないものしかない。——そうした現実があるので、みんなが遺伝子組み換えの品種を使うようになったのが実態です。

滝川 最近の情報によると、GM作物の収量はそれほど伸びておらず、除草剤が効かない雑草も現れているそうです。モンサント社などのPR

※GM大豆の栽培騒動= 2004 年秋、長沼町の宮井能雅さん経営の大規模農場がGM大豆の本格栽培を計画し、地元農協や消費者グループ、生協などの反対運動が起きた。「栽培しても大豆交付金が出ない」などを理由に、農場側は4週間で計画を撤回。同農場は日本で初めて、98、99年にGM大豆4.6haを栽培・出荷したことも表面化し、大きな波紋を広げた



配達時に同封する『野菜だより』を仕上げるスタッフたち

とは異なる面が出てきていますね。  
レイモンド 売りたい側のホームページを見ると、「遺伝子組み換え品種の収量が上がっている」とある。でも、実際には今までの品種改良技術で収量が高くなったものを遺伝子組み換えにしたので、その上の方が従来の技術の成果なんです。  
編集長 なるほどね。

レイモンド 先週、遺伝子組み換え作物の情報を流してくれるネットワークから届いた情報を見ると、「除草剤を掛けても枯れない雑草が出てきてしまったので、やるメリットがなくなってきた」とありました。(商業栽培の開始から)十四年間、同じ除草剤を使ったら、作物は抵抗性を持ってしまふ。今までは「ラウンドアップグリホサート」でよかったけれど、それでは死なない雑草が出てきています。いろんな遺伝子を積み重ねた、オプションで種を買うことができるので、農家は「雑草が枯れないと困るので、もう一つかけておこう」とか「でも、高くなるから…」となったりする。

滝川 それで、種の値段が高くなったりするわけですね。  
レイモンド (オプションが)一つ

補助金には上限額を設けて消費者が支える農業を選ぶ

滝川 長沼では数年前、GM大豆騒動(欄外を参照)があり、その後道の規制条例が制定されました。G

増えるごとに、一袋8万粒入り(五ドルくらい)高くなる。

荒谷 この問題は特許が絡んでますね。わたしたちが一番反対する理由は、種採りをするの特許侵害として農家が訴えられたりするなど、企業に農家がコントロールされることです。もちろん、「食べて安全か?」はあるんですが、それは何年も食べ続けると分からない部分がありますから。  
滝川 それと、生態系全体に与える影響という問題も大きい。雑草一つとっても、まだまだ分からない問題があります。

規模拡大や最新技術とは違う解決法を考える時期

レイモンド なぜ、この技術が生まれたかというところ、一軒の農家ももっと広い農地で作ることを可能にするためでした。トウモロコシを栽培していたけれど、遺伝子組み換え作物で省力化することによって、大豆も別に作れるようになったとか。そうすることで、農家のきびしい現状を助けようという背景から生まれてきた。でも、それができる国は限られていて、たいしては農地も少な

M大豆を作ろうとした宮井能雅さんと僕とは全く反対の考えですが、彼は勉強家ではある。レイモンドさんと宮井さんは、互いに行き来したり、議論をする仲だ聞いていますが...  
レイモンド 先日、宮井さんに招かれて東京のアメリカ大使館の人と一緒にパーベキューをしましたよ(笑)。「なぜ、北海道の消費者が遺伝子組み換え作物に反対しているのか?」ということで、大使館の貿易関係の人がやってきていた。  
滝川 向うは賛否双方の立場の話聞いたわけだ。  
レイモンド それは面白くて、勉強になった。

荒谷 宮井さんの農場で大きなコンバインの両脇にアメリカと日本の旗を飾り、みんなで記念撮影をした面白い写真がありますよ(笑)。  
レイモンド 宮井さんは大使館の人に、「農業収入として年間一億円入ってくる」と教えてくださいました。わたしは、「そのうち転作奨励金は何%ですか?」と質問した。

滝川 ああ人の場合、すご

いし、日本のように規模拡大が難しいところがたくさんある。

荒谷 規模拡大しなければ生き残れないと考えたら、遺伝子組み換え作物が一つの回答となるのでしよう。でも、そうじゃなくて、「生きるために必要な食べものを育てる仕事なのにやっつけいけないのは、どういうことなのか」と考え、そこから解決方法を見いだすべきだと思うんですよ。  
編集長 そう思いますよ。

レイモンド 三十年前、トウモロコシの種は一ブッシェル(約35リットル)三十ドルくらいで、今はその十倍になりました。トラクターや燃料、肥料も高くなった。地球温暖化問題があります。一握りの人たちが業界を牛耳っていることや、石油をたくさん使わないとやれない農業生産のあり方を見直す時期にきている。「より最新の技術で...」ではなく、違う解決方法を考える時期が訪れています。  
荒谷 小さい規模でうまく輪作を組んだりする、技術的な部分で雑草を抑えることができます。わたしたちも大豆を作りますが、手で草取りをしなくても草が出ない。



春耕シーズンもたけなわ、トラクターを運転するエップ・レイモンドさん

い金額だからなあ。  
レイモンド 国から(一億円のうち)六七%入ってくる。でも、売り上げは、うちの年間売り上げの二、三倍くらいにしかない。農場面積は二十倍もあるのに。  
荒谷 それは、単純に野菜や作物を売ったお金ですよな。  
レイモンド 転作の収入があるから、「土地を有効に使って、いいものを作ろう」という気持ちがあるかな。編集長 黙って入ってくるお金があるよな...。

レイモンド 自分の税金が具体的にどんな形態の農場を支えているのか——普通の生活者がそうした情報

『メノレレッジ長沼』からCSAの会員宅に1週間おきに野菜などを届ける。配達する野菜を準備中



レイモンド 二年間、全く手で除草していません。  
編集長 生産物の流通市場は穀物メジャー、生産の現場は種屋によってコントロールされている。そうした状況は本来、生き物にとって必要な農業の仕事になじまない、と思う。

を分かるようになれば、消費者はもっと違う農業を支えていくことを選択すると思います。転作奨励金に頼っている農家の頭の中には窓があつて、そこを覗くと何を考えているか、すぐに分かります(笑)。遺伝子組み換え技術を使えば、今の二倍の農地で農業ができ、転作奨励金は倍になる。「モア、マネー」それだけを考えている。  
荒谷 アメリカでは、一軒の農家が受け取る政府からの補助金には上限があるんです。日本にはそれがないので、転作地ならば、たくさん面積を持つているほどお金が入る。だから、それ(補助金)に上限を設けるべきだ——というのがわたしたち



特別インタビュー

村有財産を守るために社団法人を設立したのが始まり。近年は、住民の手で直売所や農産物加工施設を設置したり、グリーンツーリズム、農家レストラン、地域づくり学校の開設などに取組み、コミュニティビジネスの先進事例になっている。

**レイモンド** その作業のなかでどこに問題があって、何を覚えていくといいのか、勉強しながら一緒に進めていく——「創り上げる」と「変えていく」との両方が必要なんじゃないかな。

**編集長** 「モノビレッジ長沼」が人と人の一つの交差点になっている。国や立場、年齢、地域が違ってても、



年間2,000人ほどが見学や体験、研修などで農場を訪れる。修学旅行生も受け入れ、この日は兵庫県明石市の中学生が見学に来た。飼育してきた鶏を屠る(5月28日)

いろいろな出会いがあって、新たなものが生まれているように思いますね。

**人々との出会いの場を創り想像力を使った取組み**

**滝川** 日本では、ここに続くCSAの実践例が少ないようですが、レイモンド カナダでは最初、一カ所二百軒からCSAが始まりました(先月号を参照)。それが次の年には、十三カ所に広がった。

**滝川** なぜ日本はそうならないんだろう。CSAは元々、日本の産直の考え方を取り入れたが始まった、とされていますよね。

**荒谷** そう言われているんです

ちで話して歩いているんです。

**レイモンド** 日本でそれをやったらどうですか？

**滝川** 情報の開示は、農家も役所も嫌がるでしょうね(笑)。

**消費者や地域ともつながり新しい農業を創っていく**

**滝川** 長沼の地で十五年間、小さな農業の可能性を追求してきたわけですが、北海道はまだ、「大規模化こそ農業の生きる道だ」と思っている人がたくさんいます。農家や消費者、行政などに、「違うやり方があるんだよ」というメッセージを送っていただきたい。

**レイモンド** 数年前、道庁に呼ばれてCSAの話をして、農政部の職員たちと一緒に勉強会をしました。

**滝川** 道はたしか、予算を取ってCSAについて調査していましたね。

**レイモンド** 「北海道でCSA農業の道を進めたい」と、二〇〇六年にウイスコンシン大学の先生とうちで勉強会をやっていました。

**荒谷** 消費者とつながっている農業の実態や可能性を、各支庁(当時)の職員が調べたんですよ。

**レイモンド** わたしはいろいろな農

業問題の話をして、「網走や石狩、十勝で、この農業のやり方はできますか？」と聞いた。でも、農家がまだ危機感を持っていませんでした。問題があると分かることは大切ですが、方向を変えなくては。このままの方向で北海道の農業が進んでいったら未来はありません。そこに気づいた人が行動に移していく。現状をしっかりと踏まえ、お互いにつながり合っ

**荒谷** わたしは、「大規模が悪い」とか突き詰めるのではなくて、もっと地域に目を広げるといいと思う。先日、地域づくりに力を入れている、和歌山県田辺市の秋津野地区を視察

が(アメリカのCSAリーダーで有機農家の)エリザベス・ヘンダーソンさんに会ったときに、「そんなことはない」と言われました(笑)。でも、(日本の産直の)影響はあるようですけどね。

**レイモンド** 抽象的ですが、それぞれに時があると思う。カナダでCSAを立ち上げたとき、ちょうどアメリカとの小麦の自由化問題がありました。小麦価格が下がって農家が自殺したり、家庭内暴力がひどくなったたり、心の問題が深刻になっていく——という状況があったのです。皆さんが報道を通して、そうした農家が抱える痛みを感じていた時期だった。わたしがコミュニティ・オーガナイザーとして提供したのは、「思いを持っていても何をしたらいいかわからない人に、できることを提案する」ということでした。

最近、CSAの話が依頼されるようになり、日本でもコミュニティ・オーガナイザーの役割が必要になってきていて、と感じています。非農家の人たちが農家の抱えている現状を、逆に農家は非農家の人たちが感じているものを学ぶ——そうした出会いの場を創っていくことが第一番

しましたが、すごく印象的だったのは、あらゆる世代や職業の人たちが一緒にやっているんですね。儲けていこう「生き残っていこう」じゃなくて、それぞれが地域のなかでも暮らせることを目標にしている。だから、いろいろな立場の人がいるほど、いい取りこみになっていきます。それを見て、みんなが同じ形態になるのではなく、それぞれの立場で地域づくりをしていく——北海道は広すぎるから、まずは自分たちの住む地域のなかで互いに共存することから始めることが大事だな、と思ったんですよ。

(注)秋津野の地域づくりの原点は1950年代、700ヘクタールの



「モノビレッジ長沼」には16haの山林がある。「森のカフェ」をつくる計画も練っている

目作業です。こういう道でいきましよう」とガイド役をするのではなく、みんな話していい、少しずつ進んでいくやり方がいいんですね。そうすると、想像力を使って新しいことを生むし、すぐワクワクする。

**「CSAを勉強しよう」と動き広がりNPOも設立へ**

**荒谷** 三月に「地域を支える食と農神戸大会」があったんです。四回目になる国際会議で、CSAなどの取りこみをしている世界各地の人が大勢、短い時間で話をしました。

**滝川** ちなみに日本国内は、どのくらいの事例があるんですか？

**荒谷** CSAとしてやっているのは少なく、いろいろな学者が研究して、わたしが一番最初に始めたのと分かったようです。神戸ではレイさんが事例報告をして、後日、わたしが東京に呼ばれて学者の前でCSAの話をした。そこで皆さんが、(70年代)日本有機農業研究会を設立した(一栗照雄さんが唱えられた有機農業の「提携の定義とCSAは同じものと考えていた」と言うのです)。

**滝川** それはちょっと違いますよ。

**荒谷** CSAは地域のなかで人が

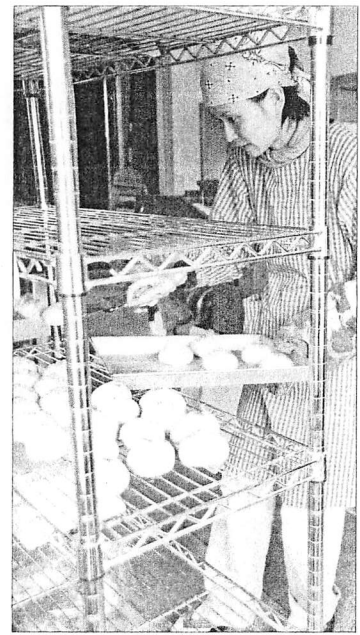
業問題の話をして、「網走や石狩、十勝で、この農業のやり方はできますか？」と聞いた。でも、農家がまだ危機感を持っていませんでした。問題があると分かることは大切ですが、方向を変えなくては。このままの方向で北海道の農業が進んでいったら未来はありません。そこに気づいた人が行動に移していく。現状をしっかりと踏まえ、お互いにつながり合っ

**荒谷** わたしは、「大規模が悪い」とか突き詰めるのではなくて、もっと地域に目を広げるといいと思う。先日、地域づくりに力を入れている、和歌山県田辺市の秋津野地区を視察

しましたが、すごく印象的だったのは、あらゆる世代や職業の人たちが一緒にやっているんですね。儲けていこう「生き残っていこう」じゃなくて、それぞれが地域のなかでも暮らせることを目標にしている。だから、いろいろな立場の人がいるほど、いい取りこみになっていきます。それを見て、みんなが同じ形態になるのではなく、それぞれの立場で地域づくりをしていく——北海道は広すぎるから、まずは自分たちの住む地域のなかで互いに共存することから始めることが大事だな、と思ったんですよ。

(注)秋津野の地域づくりの原点は1950年代、700ヘクタールの

自前で造った工房でパンを焼く荒谷明子さん。配達をきっかけに「地域づくり勉強会」も始まっている



自前で造った工房でパンを焼く荒谷明子さん。配達をきっかけに「地域づくり勉強会」も始まっている

**パンの配達からつながって地域づくり勉強会も始まる**

滝川 今後、会員やCSAに関心を持つ人たちとともに、「メノビレッジ長沼」をどう創っていくかというところ、お聞きしたい。

レイモンド あまり自分が言ってしまうと、みんなであらゆる創り上げていくものにならないんじゃないかな。

**編集長** すっかり日本人だね(笑)。滝川 農業に対してレイモンドさんは、一昔前に僕らの親たちの世代が持っていた農家の感性を体得している。そこに共鳴しているな、という感じがします。我々の世代で、そうした感性を持つている農家は少ない。かつての農家らしい姿勢で実践しているなあ、と思うね。

**編集長** ある意味で、全世界共通のファーマーズスピリットかもしれないね(笑)。

題があっても、全く決別してしまおうと暮らせなくなる現実があるので、最終的には友人としての関係は保ちつつ、相いれないところをどうやっていくのか、何度か経験しました。そうした暮らし方はいいな、と自分では思っていますね。

かな(笑)。

レイモンド 決まっていることだけはいですよ。

レイモンド ここで今、「地域づくり勉強会」をやっています。

田植えの時期にはイベントも。地元の小中学生が参加者に「田植え歌踊り」を教え、みんなで踊る(提供/メノビレッジ長沼・09年5月)



レイモンド 前回は、

「野菜はもらうもの」という感覚だから、長沼で野菜をほしがる人はほとんどいなかった。でも、パン工房を始めたら、パンは人を引きつけるものがあった、たくさん地域の人があって、たくさん地域の人が知り合えるようになった。店舗がないので注文販売なんです。ここで焼いたパンをレイさんが地域の人に配達して歩きます。町内で三、四十軒回ります。そこでつながりができて、「地域づくり勉強会」と名付けて始めました。毎回十、二十人くらいが集まります。

レイモンド 前回は、

つながり合い、安全な食べものを地域全体で食べる仕組みを創り上げよう、というものです。「提携」は、わたしとあなたの関係しか煮詰めていなくて、「その農家が生き残るために支えます」というものでした。そこに地域の観点がなかった、と逆に皆さんから教えられた。にわかには「CSAをもっと勉強しよう」という動きになり、長沼にいろんな人を招いて五月中旬にCSAの話聞くことになりました。

**編集長** 自分たちが売り込む以前に、そういう時代になってきた。求められていることじゃないのかな。

**荒谷** そうですね。一軒一軒の農家が生き残っても、地域がなくなってしまうたら、やっていけない。地域に根ざした有機農業は、安全な食を提供することで、人とつながりやすいですね。有機農業の持つ役割に注目して取りくむ人たちが少しずつ増えている。これが新しい動きとは知らなかったんですが(笑)。

**編集長** 凶らずも、ということでしょうかね。新しいアイデアは?

レイモンド CSAについてのNPOを創ることを、この一年間ずっと考えていました。

滝川 この農場自体も、新しい試みを考えていると思います。

レイモンド 先週、農地が四ヘクタールほど増えました。

滝川 今度は九ヘクタールくらいになったわけですね。

**荒谷** わたしの両親が夏ころ、農場に引越してきました。

レイモンド おじいちゃん(義父)の興味は建築です。薪と灯油のハイブリッドボイラーを作っていて、面白いよ。それに、将来は食品加工場

も造りたい。

**編集長** 長く北海道に暮らして日本という国をこぼれなくなって、違和感とか魅力的なところをお聞きしたい。

レイモンド (魅力的なのは)食べものや温泉ですね(笑)。

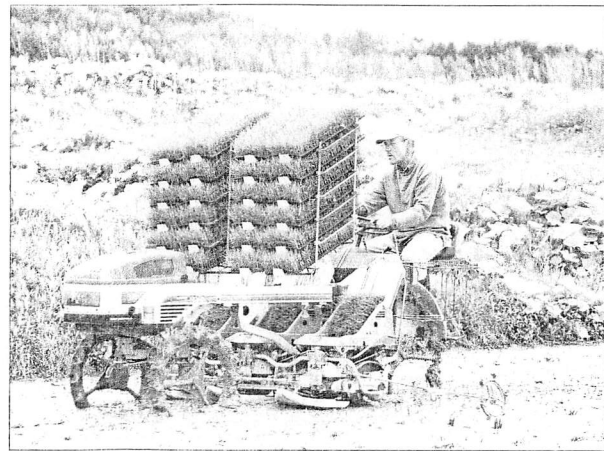
**編集長** 「日本人はここが変だよ」というところはないですか。

レイモンド 問題へのアプローチの仕方が違う。思いをどう伝えるか、わたしは一番いい方法を見つめてはいるんですけどね。農業の問題を話して、そこからみんながやる気持ちになって行動に移るんじゃないかと思うけれど、日本ではあまりそうならない。わたしはアメリカ人でクリスチャン。日本で出会う人とは違うことが多いんですが、それを自分のなかで気にならなくて話すようにしています。そうすることで、相手がみずから発

見する機会になったらいい。ともに生きるために、違う者同士がお互いに知り合っていくことが大事だと思います。

**編集長** まわりのおじいさん、おばさんたちからも、お酒を飲まされながら、いろんなことを聞かされたみたいですね(笑)。

レイモンド 地域のなかで何か問



水田もあり、今年から面積を増やした。田植え作業に動しむレイモンドさん(5月28日)